

『いとしい音のねむる庭』

著：佐竹ガム

ill：あおのなち

椎が引っ越してきてから二週間、七月も半ばに差し掛かり、もう肌寒いと感じる日はなくなった。これから暑くなることを考えると少し憂鬱になる。

共同生活が始まったものの、千秋とはほとんど顔を合わせない。椎は相変わらず早い時間に家を出るし、夜は遅くまでアルバイトをしているからだ。

千秋には最初にアルバイトの内容とシフトを尋ねられたが、風俗店で働いていることは黙っておいた。椎にとってはコンビニエンスストアやガソリンスタンドと同じ単なる労働のひとつだが、一般的にはそうじゃないことぐらいはわかっている。もしばれたとしても出ていけばいいだけだと思っているけれど、わざわざ最初にこちらから言う事でもないだろう。

それでも、シフトを答えた途端千秋は咎めるように眉根を寄せた。

「働きすぎじゃね？」

「これから減らす」

「ならいいけど、無理すんなよ。椎、体力なさそう」

「うるさい」

そんな問答もあったのだが、千秋のほうも留守が多いようだった。帰宅してもいないことが多々ある。映画館の受付でアルバイトをしているらしく、さほど詰めているようではないが、それ以外に何をしているのかはよくわからない。いかにも友人が多そうだから、普段は遊びまわっているのかもしれない。

互いのことをよく知らないまま始まった同居生活だが、簡単なルールは決めた。

掃除と洗濯は各自で、ゴミ出しは気付いたほうがやる。

食事の支度も基本的には自分でやるが、二人とも食べるような食材は折半することにした。千秋は親戚が農家をやっているそうで、ときどき野菜や米が送られてくるらしい。それを分けてもらえるのはありがたかった。今まで椎が一人で食べていた六枚切りの食パンも、今は半分を千秋が食べる。

難しいルールは特にないが、千秋は口うるさいところがあつた。

ゴミの分別に厳しいし、椎が面倒がって食事を抜くと怒る。そういう文句や小言があるとき、茶の間のちゃぶ台に手書きのメモが置かれているのが多少鬱陶しかった。

どうしてこんなに細かく怒られないといけないんだ、と思っているけれど、千秋に言われることはたいてい正論だった。それに、こんなに安く住まわせてもらっている手前言い返せない。

ただ、それ以外は順調だと思う。他人と暮らすなんて無理だと思っていたのに、今のところ困ったことは起きていなかった。

会わない日が続いても千秋からはこまめに様子うかがいのメールが来て、椎はあまり返さないけれど、その無精については咎められていない。

家を出る前に、玄関先のプランターに水をやっていると、トルコキキョウの花がひとつ咲いていた。瑞々しく水滴をはじく花びらを見ながら、椎は少し考える。

茶の間の隣には仏間があり、ときどき襖が開いたままになっていた。中に入ったことはないが、開いていれば中が見える。もちろんその部屋も清潔に保たれているが、花瓶はいつも空だった。忙しくて買いに行く暇がないのか、それとも花にまでは頓着していないのだろうか。

椎は水やりを終え、じょうろを片づけるついでに剪定ばさみを取ってくる。花を切って、仏壇の花瓶に生けた。

家のどこでも使っていていいと言われているし、仏間へ勝手に入ったことを知られても、多分千秋は咎めないだろう。

一応手を合わせてから家を出た。

今日は夜のアルバイトがある。最近はずいぶん客が付き始めていて、椎が控え室にいる時間は短くなりつつあった。

ハルカに聞いた「本番」という言葉が時折過るが、それでも常連と呼べる客ができたことは素直に嬉しかった。性欲の発散よりも、ただ椎の体に触れたり他愛ない話をしたがったりするだけの客が多いせいで、実感が湧かないのかもしれない。

朝、パンをかじりながら椎は窓の外を見た。あんなにきれいにしてみたいと思っていた庭なのに、まだ草むしりにさえ手を付けられていない。

玄関の外に並べたプランターには毎日水やりをしているが、それだけで精いっぱいだった。夏になり、窓辺ではなくきちんと外で太陽を浴びるようになって、植物たちはいっそう元気になっているというのに。

大学のほうも課題が増えてきたし、テストも近い。勉強とアルバイトの両立は、さすがに少し辛かった。眠っても疲れがとれていないと感じる日もたまにある。

家賃をぐっと抑えられたおかげで金銭的にも余裕が出てきたので、もう少ししたら店を辞めようと思っている。

よく磨かれたシンクで皿を洗い、飛び散った水滴を拭いた。

この家は広い。古いけれど大切に使い込まれていて、どこもきちんと手入れをされている。千秋がママだからということももちろんあるだろうが、それ以前の長い暮らしの歴史を感じさせた。

大学生がひとりで暮らすには余る大きさの一軒家で千秋が暮らし続けているのは、この家が思い出にあふれているからだろうか。

寂しいんだ、と言った男の顔を、椎はなんとなく忘れられずにいる。

「こんばんは、アキくん」

「指名、ありがとうございます。こんばんは」

その日、椎が呼び出されたのは常連の男だった。横原という名前が本名なのかは知らない。恰幅のいい三十代後半と思しき男で、彼が多分、椎の客の中では一番話し好きだった。

身元を明かさないうちに仕事の愚痴を言い、椎の話をつい聞きかぎる。しつこく同じ話題でぐちぐち言ったりしないから、聞いているのは苦じゃない。馴染みの客の中でも、やりやすい相手だった。

「さっきまでそこで飲んでたんだ。だから今日は勃たなさそう」

横原は財布から代金分の紙幣を取り出して椎に握らせ、最初から直截なことを言って笑う。椎は曖昧に頷くことしかできない。愛想笑いができる性格でもないのに、横原は何を気に入ったのか何度も椎を呼んでいた。

ベッドではなくソファに腰掛け、男は椎を隣に招く。朗らかな笑顔を力なく引っ込めて、困った顔をした。

「上司と飲んでただけで、結婚は考えてないのだから言われちゃって。俺もう四十だし、いい人いないのだから。今まで何度か言われてたけど、とうとうお見合い写真なんて渡されてさー」

思っていたよりも少し上だったな、と思いながら椎は黙って耳を傾ける。

「俺はゲイだし、それに……アキくんみたいな若くて線が細くてきれいな男の子が好きで、結婚なんて一番遠い言葉なのに。参るよな」

結婚なんて言葉はまだまだ考えも及ばない椎には、何も言うことができなかった。視線を下げ、首を傾げるように頷く。

「嘘でもいいから、付き合ってる人がいるんですとか言えばよかったのかな」

「でも、嘘をつきたくない相手だったんじゃないんですか」

「え」

横原ほど饒舌ならば、継続的な嘘をつくことはたやすいだろう。それでもそうしなかったのは、きっとそうしたくない相手だったからだ。思わず口を挟むと、横原は意外そうに目を丸くした。

「なんでわかったの？ そうなんだよ一、尊敬してる相手だから嘘なんかついて騙すのも嫌だし、かといってお見合いを受けるわけにもいかないから困った」

ふうっと憂いを払うようなため息を吐き、横原は笑う。

「アキくんは、いい家で育った感じがするよ」

「……そうですか？」

「うん。優しいご両親に育てられた、きちんとした子だなと思う」

椎が返答に詰まると、何かを察したのかそれともその話題に飽きたのか、横原は「まあいろいろあるよな」と雑に片づけ、当たり障りのない質問に切り替える。

椎も、個人的な情報を出さないように慎重に答えた。

やがて横原は眠そうに目をこすり始め、「大丈夫ですか」と声を掛けると頷いた。

「今日はここに泊まるからいいんだ。そうだアキくん、膝枕してよ……」

「はい」

「やった」

椎の硬い膝では寝にくいだろう。でもそれを判断するのは、椎ではなく客のほうだ。ベッドに移動して膝に横原の頭を乗せると、横原は「硬い」と楽しそうに笑いながら椎の手を握った。筋張った手の甲を撫でているうちに本格的に寝入ってしまい、よくこんな硬い枕で寝られるな、と思う。

時間までそのまま膝を貸していた椎は、終了時刻になると同時にそっと脚を引き抜き、柔らかな枕に頭を移してホテルをあとにした。

その夜、帰宅すると珍しく茶の間に人の気配があった。でも廊下には僅かな光しか漏れておらず、電気を点けてはいないらしい。手を洗いにいく前にそっと覗いた茶の間では、千秋が座椅子に座って映画を観ていた。

「おかえり」

声を掛けなかったのに、千秋は椎に気付いてこちらを振り返る。

「た」

「た？」

「……ただいま？」

「疑問型にしてんじゃねーよ」

千秋は笑い、「遅くまでお疲れ」と椎を労った。

「ありがとう」

それだけ答えて手を洗いに行く椎に、千秋の「おやすみ」という声が掛かる。一瞬立ち止まった椎も小さな声で同じ言葉を返したが、千秋に届いたかどうかはわからなかった。

部屋に入り、先ほどの会話を思い返す。

おかえり、ただいま、お疲れ、おやすみ。

あまりに久しぶりのやり取りをしたせいか、どこかむずがゆく感じた。

七月も終わりに近づき、テストが終わって緊張の糸が切れたのか、椎は体調を崩した。

朝起きてすぐ覚えた倦怠感と皮膚に纏わりつくような寒気に、熱があることを察してため息を吐く。

昔からそうだ。疲れが溜まると風邪をひきやすくなり、数日寝込むことがある。

週末なので大学は休みだがコンビニエンスストアのアルバイトは入っている。どうにか動けるうちに休む旨を伝える電話をして謝り、椎はその日一步も外に出ないことにした。

夏だというのに、布団に潜っていても寒い。薬も食べ物も部屋にはなかった。大学に入ってからしばらく、生活していくのに必死すぎてそんなものを常備しておくことさえ失念していた。

瞼を閉じるが、薄いカーテン越しに容赦なく差し込む光が眩しくてなかなか寝付けない。眠ってしまえば楽なのに、と思いながら、椎はひたすら目を開けずにいた。

「椎？ 今日バイト休み？」

眠りに沈めないままどれだけの時間が過ぎた頃だろう。無遠慮なノックの音とともに、千秋の暢気な声が聞こえて椎は瞼を開く。

「休み」

「なら下りてきてメシくらい食え」

緩慢に答えると、ドアの向こうで千秋がむっとするのがわかった。どうしてそこで怒るのか、椎には理解できない。

「いらない」

「ふざけんな、メシは食えっていつも言ってんだろ。開けるぞ」

承諾する間もなくドアが大きく開かれ、椎は布団に横たわったまま睨むように千秋を見上げた。

「.....もしかして、具合悪い？」

「察したなら閉めて」

布団から頭だけを出した椎を見て、千秋は何度か不思議そうに瞬きをする。体の気怠さに口を開くのも億劫な椎は、冷たく言った。

「あ、悪い」

千秋は謝ってドアを閉めたが、何を思ったのかまっすぐに椎の元へ向かってくる。出ていけという意味だったのに、と思ったが、抗議する気力もなかった。

「けっこう熱あるな」

千秋は椎の前髪をよけ、額にひたりと手のひらを当てる。千秋の手のひらは大きく、椎の額からはみ出していた。水仕事でもしていたのか、ひんやりと冷たい感触に椎は目を細める。

「薬ある？ ないよな。うちのやつ持ってくる。玉子粥なら食べられそうか？」

「何もしなくていい。ほっといたら治る.....」

「バカ言え、そんな無精なこと言ってたら長引くだろ。お前、働きすぎなんだよ。テストも終わったんだし休め」

千秋はそう言って椎の頭を撫でると、ようやく部屋を出ていった。頭を撫でるなんて、子ども扱いされ

ているんだらうか。

ふたたび目を閉じた椎はまた眠る努力をしてみるけれど、階下から生活音が聞こえて眠れない。床も壁も、そう薄い造りではないはずなのに今日はなぜかよく聞こえた。この下がちょうど茶の間と台所だからなのか、まな板を包丁が叩く軽快な音が一番よく聞こえてくる。

千秋とは散々すれ違っていたのに、椎がアルバイトばかりしていたことも課題で忙しかったことも知っていたらしい。

実家の母親のことを少し思い出して鬱陶しくも思ったのに、ほとんど言い返せなかった。

額に冷たい感触があって、椎は目を開ける。枕元に千秋が座っているが、その手は土鍋の載った盆に掛かっていた。

「冷却シートあったから貼った。気持ちいいだろ」

「つめたい」

「そりゃな。起きられるか？ 玉子粥と味噌汁作ってきた。薄味だけど文句言うなよ、食ったら薬飲んで寝ろ」

のそりと起き上がると、鈍い頭痛に襲われる。顔を顰めた椎に千秋は「ゆっくりでいいよ」と言い、支えるように腕を掴んだ。

膝の上に盆ごと乗せられ、ひとり用の土鍋の蓋は千秋が開けてくれる。ほわりと立ち上った湯気は甘いしょうゆの香りがして、くたくたの粥には溶き卵が入っていた。でも味噌汁のほうは、掬ったわかめはやけに長いし、ごろごろ大きなじゃがいもと、形の崩れた豆腐が入っている。完璧じゃないことが、かえてほっとした。

「無理して全部食わなくてもいいから、ゆっくり食えよ」

「うん」

玉子粥は優しい味がした。猫舌だと言ったことを覚えていたのか、少し冷ましてあるようで、やけどするほどの熱さではない。

「すごい」

「何が」

「ぬるくて食べやすいしおいしい。どうもありがとう」

「どういたしまして。でも味噌汁失敗した」

「こっちもおいしい」

「そっか、よかった」

ほっとしたように笑う千秋を見ていると、前の同居人もめた、ということが不思議でならなかった。いつでも機嫌よく、自然に相手を気遣うことができる千秋が、誰かともめ事を起こすところが想像できない。

ときどき、大学構内で千秋を見かけることがある。

背が高い上、いつ見ても人に囲まれていて楽しそうにしているから目立っていて、近くにいるとすぐわかるのだった。

こっそり様子をうかがっていると、千秋は彼らの中心にいる、ということがわかる。

屈託なく感情を表に出して、周りもそれを受け入れている。

怒っているところはまだ見たことがないけれど、周囲の人間が千秋を慕っているのはわかった。

—あんなに友だちが多いのに、どうして俺なんだらう。

一緒に暮らし始めた時から、何度も疑問に思ってきたことだった。

口うるさすぎて相手が嫌になった、というのならまだわかる。でもそれ以外、思い当たる理由がなかつ

た。

「訊いてもいい？」

「うん？」

「前の同居人と、なんでもめたの」

「えー……なんでって」

「口うるさすぎてとか？」

「……んー、まあそんな感じ」

曖昧な返事を聞いて、これについては話すつもりがないのだと察して椎はそれ以上迫及するのをやめた。椎も千秋に言っていないことがあるように、千秋にも言えないことがあるんだろう。

親鳥が雛の食事を見守るみたいに、千秋は椎が食べている間ずっとそばにいた。

土鍋もお椀も空にすると、さっさと千秋は盆をよけて、今度は薬と水の入ったグラスを渡される。椎は布団から一歩も出ないまま全て終わってしまった。

薬を飲んだところまで見届けた千秋は、「何かあったら呼べよ。今日はずっと家にいるから」と言って部屋を出ていく。椎は元通り布団に潜り込み、ゆっくりとまばたきをした。

温かい食事をとったおかげか、先ほどまであんなにひどかった寒気が落ち着いている。額の冷たさも心地よく、瞼を閉じると自然に眠れそうだった。

部屋の中はまだ明るい。熱も下がっていない。でも、椎は穏やかな気持ちですぐに眠りについた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>